

小学生の野球に携わって学んだこと

—その5 「見守るゆとり」「許す心」「待つ勇気」—

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)



小学生のスポーツは基本的には「子どもの、子どもによる、子どものためのスポーツである」という見方が必要であると思う。「子どものためのスポーツ」とは、大人の立場だとか、利益とか、満足心のために行うスポーツではなくて、子ども自身が本当に好きでやるスポーツでなければならないと思っている。勝つことが最優先のスポーツ環境でも、私が敢えて「小学生のスポーツは遊びの範疇を越えてはならない」ことにこだわり続ける理由である。

これまで「どの子にも生きる喜びと勇気とを」を活動の中心に掲げ、主張して40年。社会の風潮に飲み込まれることなく、ぶれずに活動をしてきたことには満足している。しかしながら、その一方で苦勞を共にしてきたコーチの方々にとって、40年間、自由な日曜日のなかったことを知り、理事長として、配慮に欠けていたことを今になって気づく。子どもたちと接し、子どもの実情を知り、更に、コーチたちとの信頼と友情を通して、スポーツの意義、大人の有様を学んだ。卒団生は650名を超えた。卒団した団員が不条理な大人社会で苦戦を強いられているのではないかと心配は尽きないが、それでも、第一期修了生が50才を過ぎ、思わぬところで再会し、その成長ぶりに驚くことも多い。

— 高校の野球部を退部したM君 —

M君は運動能力が高く、動き回ることが大好きな少年だった。「甲子園」に憧れ、高校入学と同時に野球部に入部したが、1年間で退部した。久しぶりに会ったM君に「理事長は君がなぜ退部したかわかるような気がする…」と伝えると、M君はボロボロ涙を流し、男泣きをした。M君の

退部の理由は定かではないが、きっと、M君が描いていた高校野球と現実との間に大きな違いがあったのだと思う。一般的に、退部の理由は子どもの側にその原因があると決めつけ、処理されることが多いが、周囲の大人たちが、もっと、子どもたちの言動にもしっかりと目を向けてほしいと思う。その責任の一端を感じる。偶然、数年前にM君と秋田駅前であつたが、「今、草野球を楽しんでいる。」と笑顔で語っていた。

— 自動車販売店の店長S君 —

S君が車屋さんの店長をしていることを聞き、車購入の相談で訪れた。S君のリトル時代は野球選手としての印象は薄い、「背が高く、やせ型、寡黙だがしっかりと自分の考えを持った存在感のある団員」だった。遠くの方から、のっし、のっしと歩く姿は少年時代そのままだった。久しぶりに会った第一声が「理事長！何も変わってないネが」だった。さすが多くの店員を束ねる店長。その堂々とした態度に圧倒された。S君が席を外した際に、担当のセールスマンの方にそっとS君のことについて聞いてみた。「店長はかなり厳しいッスよ。でも、心優しいのでついて行けます。店長は人事と総務も担当し、多忙な毎日です。」想像した通りの嬉しい言葉に満足し、ホッとする。S君は帰り際に、「理事長！『勝つことよりも大切なことがある』『みんなで仲良く助け合う』『自分で考え判断し行動する』だべ。理事長が練習後のミーティングで毎回同じことを言っていたので忘れないッスよ。」突然の思いもよらぬS君の言葉に驚き、即、「車購入」にサイン。S君、理事長へのサービスは決して忘れていなかった。

— 小児科医のI君 —

私は秋田県立栗田支援学校の学校歯科医になって20年以上になる。30数年前の小学生時代に共にスポーツを楽しんだI君が、小児科医として同校の校医となり、保健委員会などで同席することになった。I君は小児科医として開業の傍ら、県内の発達障害児の支援にも積極的に取り組み、患者さんからの信頼も厚い。「私は運動はあまり得意ではなかったが、様々なスポーツを体験できて、楽しかった。当時の体験や、コーチの方々の子どもたちに接する姿勢が、今、診察に活かされている…」と語っていた。I先生は保健員会では先生たちからの質問に、いつもわかりやすく丁寧に答えている。少年時代の自由で屈託のない笑顔、心優しさをふと思い出す。I君の小児科医としての発言を通して、私は改めて、子どもの成長発育と生体の特徴などをI君から学んでいる。

— 理事長の考え方を伝承するN君 —

N君は阪神タイガースの縦縞のユニフォームに憧れ、リトルリーグ・クーガーズに入団した(クーガーズのユニフォームは阪神似の縦縞ユニフォーム)。N君は地域でも評判の「野球大好き少年」だった。中学校、高校ではエースとしてチームを牽引する。プロ野球のドラフト候補として話題にもなった。「小学生時代の理事長との野球を息子にも体験させたい」との理由で、息子さんが遠い地域から練習に参加していた。N君は長い間、コーチとして団員の指導にあたり、現在は母校である高校のコーチをしている。8歳から10歳頃までに出来上がった人格や体験を通じて、多くの人は成人後の生活をする傾向が強いと言われる。N君の行動を通してそのことを実感するとともに、改めて小学生スポーツの大切さを再認識する。理事長の考え方がN君を通して、更に高校球児へ伝承されている。常に相手としっかり向き合い、心優しい指導をしているN君の成長が嬉しい。

— S・D君の社内ブログ —

友人が所長を務めている司法書士事務所にS・D君が勤務していることを聞き、訪ねてみた。背広姿が良く似合う格好いい青年に成長していた。世間話をしているうちに、すぐに、理事長とビーズのS・D君になり、終始、リトル時代の話題に花が咲く。後日、事務所からS・D君の次のような社内ブログが送られてきた。

～年が明けてから嬉しい再会がありました～

秋田リトルリーグ時代にお世話になった三浦捷也理事長との再会。30年ぶりでした。理事長に「ダイスケか!」と呼びかけられた瞬間、もう私は小学生の僕でした。大人になってから、愛情いっばいに「ダイスケ」と呼んでくださる人はなかなかいません。それだけで胸がいっばいです。「俺のことを覚えているか」と聞かれましたが、忘れるわけがないでしょう。(中略)三浦理事長のもとで野球ができたことを誇りに思います…」

S・D君は常に前を向き、心豊かに成長していた。嬉しい再会となった。「頑張れ、ダイスケ!」



子どもたちは、自分自身の強さも弱さも十分知りながら、どの子も一様に夢と希望と生きることへの強いこだわりを持っている。団員との練習のなかで、子どもたちの外観や見た目などではわからない意外な能力や、予想をはるかに超えた著しい変化に直面し、びっくりすることも少なくない。だから、あらかじめ限定することなく、広がりを持った視野のなかで接することが大切だ。今、社会人になった卒団生と再会し、殊更、その印象が強い。世の中が急速に変化し便利になったが、その一方で「惻隱の心」が失われている。子どもの健全な育成には、昔と同じような時間がかかるのだろう。40年間の活動を通じて、改めて「見守るゆとり」「許す心」「待つ勇氣」の大切さを学んだ。

— どの子にも生きる喜びと勇氣とを — 完